

れたら勿體ないと申して居りましたと、こんな事を云ひよるのぢや、親の頭より酒の方が大事に思ふて居るそんな倅は内へ入れる事は出来ません、表を開けずに放つときなされ」

「ナア親父どん腹も立つやろうが、今晚の處は妾に免じて内へ入れて遣つとくれ」

「イヤなりません」

「マア〜そうぢやろうが妾に免じて」

と女親は子に掛つたら甘いもので、マア〜の八百も云ふて内へ入れて寝さしましたが、其の後へ歸つて参りましたのがマア筋向ひの息子さん、同じ位ひの年輩で商賣が大工さん、至つて極道で、男の極道と申しますと大抵極つて居りますが、此息子の極道と云ふのは風變りで火事と喧嘩が至つて好き、火事と喧嘩が有つたら飯を食べいでも腹が空かんと云ふ、妙な極道も有るもので

「ア、とうない遅ふなつた拍子の悪い、段々不景氣になつて火事も喧嘩も無いようになった、一遍血の雨の降る様な喧嘩をさらさんかいな、腕がウナツてるねがな」

「うどんやエそばいやう……」

「ア、うどん屋が居よる、ヤイうどん屋」

「ヘエ」

「熱さから」

「ヘエ親方嬲らんと置いとくなアレや、熱いと云ふたら暑けりや肩脱げと云ほうや思ふてなはるねやろう」

「誰がそんな事を云ふた、熱いかと尋ねてるのぢや」

「さよか、宜い加減だす」

「なんぢや、宜い加減ぢやと、そんなら一杯呉れい」

「うどんだすか蕎麥だつか」

「湯ぢや」

「アノ湯、湯を何しなはるね」

「何するかい、今其處で泥の中へ足を突込んだので足を洗ふのぢや」

「モシ、うだ〜云ひなはんや、貴郎が足を洗ふのんを此の辛い時節に高い炭を焚いて湯を沸して待つてますかいな」

「何を、汝大分洒落た事を吐すな、俺にほげたを吐くとは少し骨の有る奴やな、サア命のけころをいこう、サア來ひ」

「モシ〜、そんな無茶な事したら不可ん、うどんの荷がひつくり返りますがな、チョツと待とくなはれ今湯をかけます、とうない無茶な人やな、ヘエさようなら」